

団体名		<b>田富町自然体験クラブ(山梨県田富町)</b> <a href="http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Club/3343/">http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Club/3343/</a>	
団体の概要	活動開始年	西暦 1999年 4月 活動開始	
	メンバー 人数	<役員数> 10名 <事務局スタッフ数> 1名 <ボランティア数> 20名	
		構成	自営業、会社員、会社役員、地方公務員、主婦、学生
	予算規模	平成13年度概算 ・収入 320,000円(子ども夢基金) 80,000円(負担金、寄付金) ・支出 400,000円	
団体の目的		遊びを通して、自然や人とのふれあいを深め、自主自立の精神や失われつつある冒険心を養い、思いやりや自分の身は自分で守る事を身につけさせることを目的としている。	

#### 学校と連携しているボランティア活動の概要

学校との最初の直接的なつながりは、田富中学校の校庭にビオトープを造成したことからだった。中学校から、校庭に湧き水が出るので小川を作りたいという相談を受けて、中心となって生徒と一緒に作った。基礎工事は、メンバーの協力によりショベルカーを用いて行い、生徒は穴を掘る、木を植える、石を詰めるなど周辺を整備した。

会の代表者は、田富中学校の校長とは、共にまちづくり塾のメンバーだったことから、以前から親しい付き合いがあった。また、代表者がPTAの役員を3年間引き受けたことで、保護者や先生方の理解や協力が得られた。

この団体の主な活動は、中学生を中心に、富士川下りや釜無川下り、カヌー教室などのアドベンチャー体験や、川掃除、水難救助訓練、川という自然を活用した活動を行っている。また、植林や間伐、巣箱づくりなどの森林保全ボランティア、きもだめし大会や焼き芋大会、少年自然の家でのサバイバル合宿、バスケットボールやサッカーリーグの開催、受験生の勉強会なども行っている。

こうした活動について、子どもたちが参加しやすいような体制とするには、学校行事や部活動等の生徒が忙しい時期を避けて事業を実施する必要があるため、学校と事前に打ち合わせをしてから、学校を通して子ども達に活動への参加募集を呼びかけている。参加は自由だが、多くの子どもが参加している。学校との連携体制がとられていることで、保護者にも信頼されている。

学校や地域から情報を集めて、部活動にも入っておらず、放課後に所在なさげにしているような子どもに積極的に声かけをして、活動に参加してもらおうようにしている。子どもは声をかけられると嬉しいようで、結構行事に参加するようになる。

### ボランティア活動を立ち上げた経緯

田富町は自然豊かな地域で、近年は甲府市のベッドタウンとして発展してきたものの、子どもが外遊びをしている姿はあまり見られなくなっていた。そこで、代表は、町主催のまちづくり塾に参加したときに、子どもと一緒に、昔、めだかがいっぱいだった川に、再びめだかを呼び戻そうという活動を始めた。地域の小中学生から「めだか特派員」を募集し、無償で借りることのできた休耕田に池を作り、とってきためだかをそこで繁殖させて川に戻す活動をした。そのかわり、子どもに外遊びを教えようと、いかだ作りや竹細工など、代表が子どもの頃にした遊びを子どもたちに教えた。

そうした活動が次第に発展していき、1997年に「常永川復元の会」を設立して、常永川の環境保存を訴えるために、常永川のいかだ下りイベントを企画・実施した。3年目に、それまで継続してきた常永川のいかだ下りのイベントから、子ども達にもっと自然体験をしてもらう機会を提供するために、田富町自然体験クラブを設立した。

遊び好きの父親や母親、面倒見のよい地域の方にボランティアとしての協力を呼びかけ、子どもだけでなく大人も楽しめるような活動にするよう工夫している。また、最近では、中学生の時に田富町自然体験クラブの事業に参加したことがある高校生が、ジュニアリーダーとして活躍している。危険を伴う冒険遊びが多いが、助けたり助けられたりの関係がごく自然に見られる。大人がそばにいて一から十まで教えなくても、十分子ども達だけで生きる力は持っている。

### 学校と連携を行う際の工夫

#### <工夫：安全対策には万全を期す>

学校と連携するにあたっては、まず、校長先生の理解と協力を得ることが必要である。学校責任者である校長先生の一番の心配は子どもの安全面であるので、安全対策については万全を期して、アピールをすることで理解が得られた。スポーツ保険、レクリエーション保険など活動に合わせた保険に加入している。いかだ下りは、それらの保険には加入できないので、国内旅行保険に入った。

本番の前には必ず大人が実際に行ってみて、危険箇所などをチェックしている。いかだ下りの時には、川の状態について国土交通省から情報を得て危険を予測した。さらに本番では、消防車にも出動を要請して安全を図った。

#### <工夫：学校に通って、教職員と関係性をつくる>

直接、何度も学校に足を運ぶことが大切である。校長先生や教頭先生をはじめとし、担任の先生や部活担当の先生など、顔を見せて話をして、事業を理解してもらうことが重要である。そこから信頼関係が生まれ、学校の情報も聞くことができる。

学校の先生は異動があるため、たとえ同じ学校であっても、毎年初心忘れず、何度も学校へ足を運んでいる。

<工夫 : 学校の特徴を理解する>

これまで田富町自然体験クラブの活動に参加する子ども達が通う学校は6町村におよぶ。学校によって、学校としての対応や方針などがまったく違うし、学校の雰囲気によって子ども達の反応も違う。そうした状況を把握して、それぞれの学校の事情にも配慮しながら、協力を呼びかけていくことが重要である。

今後の課題と展望

マスコミ等で知名度も上がり、県下全域にわたる講演活動で学校関係者や教育委員、保護者等に浸透し、理解が得られたおかげで、今後は近隣市町村だけでなく、全県から参加者を募集することになった。

(代表者によるレポート、代表者へのヒアリング調査、団体資料より作成)

<パドル作成>



<いかだ川くだり>



<この事例のポイント>

団体の代表は、学校と連携するとき、最初は教師と個人レベルの信頼関係を築いていき、その後校長や他の教師、さらには教育委員会を巻き込んで、学校という組織との関係に発展させている。これが成功のポイントである。個人の関係だけでは、熱意のある教師が学校内で孤立してしまったり、教師の異動で関係が消滅してしまう恐れがあるが、学校や教育委員会という組織レベルでの連携によって活動が継続し広がりを見せている。

高校に進学したクラブの卒業生が、ジュニアリーダーという指導者として活躍している。卒業生達は経験者であり、クラブの事業内容も熟知しているため、後輩にとっても高校生達が身近な目標となり、異年齢集団での交流が効果的にできている。単に子ども達に自然体験の場を提供するにとどまらず、子ども自身を信用して自主性を尊重することで、子どもが本来持っているはずの生きる力をより大きく引き出すことに成功している。